ニュージーランドの日本語教育(2)
―言語政策と日本語シラバス―

縫　部　義　憲

1．中等教育カリキュラムにおける言語政策史

ニュージーランドの中等教育段階で日本語が教えられ始めたのは、1960年代後半からである。したがって、中等教育においては、約30年間の日本語教育の歴史があることになる。しかし、日本語教育に対する関心が急激且つコンスタントに増大してきたのは1980年代前半からである（Aschoff 1991：2）。日本語学習者数を年次別に調べてみる（Source： NZ Ministry of Education）とその推移がよく分かる(表1を参照)。

表1．年代別日本語学習者数

	F 3	F 4	F 5	F 6	F 7	TOTAL
1981	706	363	216	211	63	1,519
1982	715	473	216	207	66	1,677
1983	787	480	238	199	83	1,787
1984	1050	647	301	245	93	2,326
1985	1449	897	453	296	104	3,199
1986	1899	1257	559	488	146	4,349
1987	2681	1567	816	624	233	5,921
1988	3963	1963	974	749	219	7,868
1989	5123	2431	1229	928	328	10,039
1990	6186	3298	1454	1090	414	12,442
1991	8069	3947	1965	1336	604	15,921

（注）F: Form（学年）

外国語教育全体の中で日本語教育がどのように推移しているかを調べてみる（Source： NZ Ministry of Education)。英語（母語）と主要外国語のみに限定し、日本語教育の推移との比較をする。

仏語学習者数は毎年減少しており、逆に、日本語学習者は年々増加しているのが分かる。とりわけ1987年から急激に増加していっている。1991年度では、外国語学習者数の51.00%が仏語（1990年度 56.57%)、 29.85%が日本語（同 24.30%)、16.89%が独語（同 17.60%)、をそれぞれ履習している。その背景については別稿（縫部　1992）で報告しているので参照していただきたい。日本語を学校教育に導入することに対する抵抗がかなり強かった中で、R.D. Muldoon 卿は、将来ニュージーランドはアジアとりわけ日本との文化的経済的関係が密接になってくることを見通し、日本語教育の導入を主張したことが大きな原動力となった（ Welch 1992：1)。

表2．英語と主要外国語の学習者数の推移

	英　語	仏　語	独　語	日本語
1972	166680	44774	5550	―
1977	229181	40808	8026	1771
1982	218537	34520	9003	1677
1987	226422	31006	8300	5921
1988	226411	31008	8614	7868
1989	226041	31275	8500	10039
1990	225375	28964	9008	12442
1991	220912	27720	9009	15921

中等教育カリキュラムの発展を眺めながら、日本語がどのように位置付けられていったかを調べてみる（ Welch　1992を参照)。中等教育カリキュラムの変革をもたらしたのは　Thomas Report（The Post Primary School Curriculum, Wellington, Department of Educaion, 1943）と Currie Report（Report of the Commission on Education in New Zealand）（1962）である。前者はコア・カリキュラムの中に外国語を含めてはいなかったが、中等学校においてできるだけ多様な外国語を導入することを提唱している。広い教育の必要性を強調し、早くから職業教育など専門分化することに否定的であった。

後者は教育条件に関する報告書である。教育行政や学校の組織、近代的教具、教員養成などについて

大規模に調べている。重要な貢献の1つはコミッション制を提案し、主要な教科に対する国家的責任を任務とする視学官が初めて任命された。カリキュラムの自由裁量が認められはじめ、中等教育段階における外国語の多様性が公的に模索されていく。これがMarshall Report (Report of the Working Party on Second Language Learning in New Zealand,-Wellington Department of Education, 1976) として発表される。その中で、今までに与えられなかった多様な言語を導入し、初等から中等へ、そして高等へと、暫次展開していくようにカリキュラム化を図るべきであるとした。

1968年から1970年の間に、外国語シニア・カリキュラム専門官がオークランド、ハミルトン、パーマストンノース、ウエリントン、クライストチャーチで6年生 (Form Six) の一部の授業を使って日本語教育のパイロット計画を開始した。この試験的授業は週2時間放課後を使って実施された。文部省、大学やポリテクニーク、高校の校長など、関係者の視察と調査が念入りになされた。この授業がニュージーランドにおける中等教育段階の日本語教育の公式な出発となった。

この後、10年間位にわたって、外国語シニア・カリキュラム専門官は、日本語に関して次の責任を負った (Welch 1992：4－5)。

(1)中等学校における日本語パイロット計画の設置
(2)日本語を教えたい教師のための授業の設置
(3)教科書や教授法に関する教員研修コースの設置
(4)日本語教師から成る日本語シラバス委員会の開催
(5)特に初級段階における日本語教育の進展に関する調査の実施 (1972－1984年)
(6)第5学年の国家試験 (School Certificate Examination) と第7学年の大学入学国家試験 (University Entrance Examination) の作定
(7)チャートウエル小学校に対する日本語・日本文化シラバスの作定 (文部省に提出) と小学校段階における日本語教育の進展を追跡調査
(8)中等学校における日本語教育の実態調査の文部省への報告

(注) チャートウエル小学校は、ウエリントン郊外にあり、現地校と日本人補習校が統合された小学校 (joint venture) である。午後は外国語の授業を実施し、日本人教師はNZ人小学生に日本語を、NZ人教師は日本人小学生にESLを、それぞれ教える。ニュージーランドの小学校で正規に日本語を教え始めた最初の小学校である。小学校用の日本語シラバスを作定している。

1969年にクライストチャーチに日本語巡回指導員が任命されると、日本語に対する関心が強まった。日本語教室訪問指導による調査結果、日本語口頭能力が順当に向上していることが報告され、上記の日本語計画が一応成功していることが確認された。1972年に4地区の中等学校に最初のアンケートが送られ、日本語教育の実態と数年間にわたる推移が調査された。日本語を教えている学校数は、1972年27校、1973年26校、1974年33校と漸増している。生徒数については、1972年 614人、1973年 689人、1974年1086人と急増の兆候が見られた。

(注) 高等教育段階の日本語受講者数は、1973年でuniversity 338人、 university extension classes 145人, technical institutes 225人であった。

1973年には日本政府によって3人の日本語教師が日本に招請され、日本の公的な機関で日本語・日本文化研修を初めて受けている。

2．日本語シラバス草案の作定

1982年11月に文部省は日本語シラバス委員会を設置した。1983年に本委員会が開かれ、その仕事は次の3点であった。

(1)中等教育における日本語教育の現状を考察し、海外 (注. NZ) における発展の可能性を探ること
(2)社会・生徒・教科のことを考慮にいれて3－7学年用日本語シラバスを作定すること
(3)国家試験委員会や大学入学試験委員会と日本語国家試験規約に関して協議すること

1984年に日本語レベル1シラバス (第3－5学年用) の草案を作成した。

1985年3月の最後の会議で、本委員会は次のことを行った。

(1)第3－5学年用日本語シラバス草案の改訂
(2)語彙リストの修正 (単語を約 300だけ減少)
(3)第6学年用レベル2シラバスの草案作成
(4)第6学年国家試験のガイドライン作成
(5)第5学年国家試験の規定の草案作成 (1987年に改訂)

1982年　文部省が第３－７学年用日本語シラバス作成の決定。第３学年用日本語シラバスのみ作成。
1984年　レベル１シラバス草案作定
1985年　レベル１シラバス改訂と第５学年国家試験規定の作定。レベル２シラバス草案作成。
1988年　レベル３シラバス草案作定
1989年　レベル２＆３シラバス草案が日本語委員会に提出。
1991年　日本語シラバスのレベル１とレベル２＆３の最終版の再点検。
1992年　日本語シラバスの最終版作成作業。

日本語シラバスの完成版は1991年末までに発表される予定になっていたが、諸般の事情で1991年にInterim Report として各学校に配布されている。一方で、草案の根本的見直し説も出ている。その理由の１つは、当時思いつき的な単語の選定が行われた面があり、さらに慎重を期す必要があるという指摘である。第２は、レベル１シラバスとレベル２＆３シラバス間の段差が大きく、後者のシラバスが２年間で消化するには単語数が多く、しかも結構難しい単語も多い、一度に沢山の漢字か出現して（第６学年で65字、第７学年で 200字）いるので漢字学習が難しいという声が教育現場から上がっているからである。

３．日本語シラバス草案（1984）の分析

日本語シラバスのレベル１の構成は次の通りとなっている。

(1)導入部：理念／教授法の箇所で、前書き（歴史的背景)、日本語学習のイロハ、シラバスの根本原理、伝達中心の日本語教授法、評価について述べてある。
(2)シラバスの内容：　トピック、トピック毎の単語一覧、文化、慣用表現、文法となっている。
(3)文法項目表、アルファベット順の語彙表

導入部で強調してある日本語指導法に対する考え方は、まずコミュニカティブに日本語を教えること（ effective communication) である。聞くこと・話すことは言うまでもなく、読むこと・書くことにおいてもコミュニカティブな指導を取ることが強調されている。日本語シラバスの「一般的な目標」においてもこの点が次のように強調されている。

(1)日本語を聞くこと・話すこと・読むこと・書くことの基礎的運用能力を獲得すること
(2)様々な社会的場面に適切な非言語的手段を用いること
(3)日本語コースに日本文化を統合することによって日本人に関する知識や理解を得ること
(4)個々の文化面の違いに対する認識と尊重を育むこと

このように、本シラバスの目標では、オーラル・コミュニケーションと言語・文化の統合的学習が強調されている。これをNZの高校生の日本語学習動機の調査結果（Aschoff 1992： 5）と比べてみる。

表３．NZ高校生の日本語学習動機調査結果

Rank	Goal	No.	% of total student group
1	Career tool	873	89.3
2	For travel	702	71.8
3	Oral communication	619	63.3
4	Enjoyment of life	525	53.7
5	Broaden educational experience	463	47.3
6	Cultural understanding	444	45.4
7	Learning of other places and times	368	37.6

３と６は本シラバスが最も強調している点であるので問題がない。２、４、７の中味は、本シラバスのトピックの中に取り入れてある。日本語が就職の手段として有効であると高校生は考えているが、本シラバスは就職してもすぐに使える日本語力をつけることは目指していない。NZ日本語シラバスは教育的観点を重視しているのである。

第２の留意点は，言語的・非言語的コミュニケーションという視点である。非言語的コミュニケーションを取り上げているのはコミュニケーションを重視しているからであるが、これは社会言語学的視点と呼べる。単に日本語文法を教えればいいという言語偏重主義（verbalism）を避けなければならない。

第３の留意点は、日本語と日本文化の統合の視点である。そのためには、１つは日本語教材の中に文化的視点を導入し、文化教材を位置づけること、２つは文化プロジェクトを年間計画の中でカリキュラ

ム化することである。したがって、日本文化シラバス表を作成しておく必要がある。

第4の留意点は、言語感覚・言語認識を磨くという日本語学的視点や英語と日本語との言語・発想法の違いを気付かせる対照言語学的視点が本シラバスの一般的目標においては弱いように思われる。最後に、教育学的視点についても指摘しておきたい。学習者が考える"Broaden educational experience"は何を指しているのかは不明であるが、グローバルな視野、複眼的思考、違いに対する寛容性、地球コミュニティーづくり、対人関係形成、自己実現など、教師は学習者に日本語・日本文化を教えることを通して何を「育てる」のかをシラバスの前文は明示すべきではないか。

さて、上記の言語運用能力と文化理解という目標を達成するために、教授法はコミュニカティブ・アプローチを、シラバスはコミュニカティブ・シラバスの1つである「トピック・シラバス」を採用している。なお、トピックの中味は次の通りである。

(1)レベル1のトピック

1. Introducing yourself and others
2. The classroom
3. Weather and seasons
4. Shopping
5. Times and dates
6. Talking about your family and others' families
7. Describing yourself, your family, and other people
8. Describing your home and daily routine
9. Your town and how to get around
10. Sport, leisure, and hobbies
11. Eating and drinking
12. Health
13. School life
14. Travel and holidays

(2)レベル2&3のトピック

1. Land and people (Japan/New Zealand)
2. Family Life
3. Leisure activities
4. Communications and the media
5. The Japanese school system
6. Japan at work
7. Eating and drinking
8. Travel and tourism

これらのトピックの選定と配列に関して次の様な問題点がある。

(1)レベル1とレベル2&3のトピックにダブリがある。内容的整合性をどうするか。
(例) レジャー、旅行、飲食

(2)トピック配列の順次性と系統性のコンセプトが不明である。必ずしも身近か疎遠か、という基準でもない。
(例) なぜSchool Lifeがレベル1で、Family Lifeがレベル2&3なのか。

(3)トピックに加えて概念・機能や場面も含まれている。純粋にトピック・シラバスと呼べるのか。
(例)「自己紹介・他者紹介」「自分の家族・人の家族・他者の描写」は機能に属し、「教室」「旅行」は場面に属する。

(4)レベル2とレベル3を区別して扱うべきか、一体のものとして扱うべきか、不明である。別個のものとして扱うにはトピックが多すぎる。一体のものとして扱うにはトピックとそれが含む語彙の整合性を根本から検討し直す必要がある。

(5)トピックの配列順序は指導者に任されている。コミュニカティブ・シラバスに共通した問題点である概念・機能、場面、話題の配列の原理がないことである。これでは教育現場は混乱してしまう。

NZ日本語シラバスには，単語が合計1、230語含まれている。但し、漢数字や国名、月名など固有名詞は別個である。一方、日本語教育学会編（1991）の初級日本語語彙には1、035語含まれている。この中には、漢数字や国名や月名なども含まれているので単純な比較はできないが、概して語彙数から言えば、NZ日本語シラバス（レベル1～3）は初級段階用と考えて差し支えない。

まず、量的に、日本語教育学会編の初級日本語語彙とNZ日本語シラバスの語彙とを比較してみる。日本語教育学会編（1991）の初級語彙にはあるが、NZ日本語シラバスには含まれていない語は、1、035語の内287語である（27.7%）。また、NZ日本語シラバスにはあるが日本語教育学会編（1991）にはない語は、レベル1シラバスにおいては588語の内132語（22.4%）、レベル2&3シラバスにおいては642語の内372語（57.9%）であり、全体的には約41%が重なっているだけである。

次に、質的に、両者を比較してみる。日本語教育学会編（1991）にある単語の内、次の単語はNZ日

本語シラバスに入っていないが必要と思われるものである。

あちら、あの、一度（も）、腕、押す、落とす、おととし、おる（いる）、お礼、～回、家具、肩、固い、形、消える、首、紅茶、午前中、この、こんな（に）、最近、最後、しまう、招待、丈夫、ずいぶん、先日、洗濯機、扇風機、そう、そちら、その、それから、そんな（に）、大好き、尋ねる、多分、足りる、だれか（も）、月、テープレコーダー、でも、ドア、どうして、特に、図書室、どちら（さま）、どの、なぜ、ニンジン、盗む、ぬれる、～年間、運ぶ、バター、花屋、バラ、（風邪を）ひく、必要、袋、踏む、プレゼント、風呂、文房具屋、別、ベル、ボタン、ほとんど、ほめる、ミルク、胸、もう、もし、もったいない、戻る、者、約、～やすい、やる（する）、柔らかい、湯、夕食、夢、横、割る（れる）

逆に、NZ日本語シラバスにはあるが、日本語教育学会編（1991）にはなく、加える必要があると思われるものは次の通りである。

［レベル1シラバス］

（お）べんとう、（お）はし、（お）さら、～時間（目）、ばん、バレーボール、ビデオ、ちゃ色（の）、ちゃわん、だけ、デザート、どう物園、ギター、ハンバーガー、花見、ハンカチ、へん（な）、い間、いなか、じゃがいも、カレーライス、川、家ぞく、木、きいろい、きこえる、今ばん、今週、公園、空こう、毎年（週、月）、まんが、みどり（の）、みそしる、みずうみ、森、お茶、おじいさん、おみやげ、オートバイ、お手あらい、おつり、おわり、ピクニック、ポスト、プール、りょかん、サッカー、サラリーマン、社会、シャワー、しあい、しんごう、しゅみ、しゅうまつ、すきやき、大切（な）、たたみ、とだな、つまらない、つり、強い、馬、生まれる、牛、わたる、やせる

［レベル2＆3シラバス］

（お）ぼん、（お）こめ、（お）まつり、（お）しょう月、（お）年より、～ちゃん、～川、～方、～すぎる、あぶない、アジア、アマチュア、あんない所、番ぐみ、びんぼう（な）、ピザ、ぼうえき、ボーナス、文ぽう、文、ぶたにく、地方、チーム、近く、だいぶ、だん地、だんだん、出口、電話ちょう、道ろ、エスカレーター、ふく、フライ（にする）、ふすま、ふうとう、ガイド、学っき、がんばる、ガソリン、ガス、ゲーム、ぎむ教いく、牛にく、はじめ、半分、発音、はずかしい、へいわ、へん事、インスタント、石、いとこ、いや（な）、じゃま、じゃんけん、時だい、自どうはん売き、時間わり、時刻ひょう、事む員、自ゆう、じゅく、じゅうぶん、かいだん、会ぎ、家事、かき、か目、かなり、かなしい、金持ち、かん字、かんじる、かん東、かん西、カラオケ、かた道、かう、かわく、かわる、火山、かぞえる、けが、けいさつ、けっこう（な）、きびしい、近所、きそく、きっと、声、公がい、工ぎょう、交通、こたつ、小づつみ、くも、くらべる、空気、きゅうきゅう車、きゅうりょう、まご、まける、まもる、まんいん、メニュー、みなと、もも、もらう、むかし、村、むり、むしあつい、むすこ、むすめ、なげる、生（の）、なおす、なし、にがい、にぎやか（な）、日本間、人ぎょう、のうぎょう、乗り物、おかしい、おこる、おんせん、おうふく、おし入れ、おとなしい、おわり、おやつ、おゆ、パスポート、パトカー、ペン、ラッシュアワー、れいぼう、せいふ、せいじ、せいせき、せきにん、石ゆ、せん手、せんそう、社長、島、品物、しんじる、しっぱい、知らせる、しょうじ、しゅ都、そうしき、すごい、すいか、すもう、すっぱい、すてき（な）、ストレス、たい風、ためる、ていねい（な）、てい年たいしょく、てん、とじる、とくべつ（な）、とめる、とうちゃく、通る、トラック、鳥、とる、都市、つめ物、つれていく、つたえる、ワープロ、わらう、わ食、わすれ物、わたる、やぶる、やね、よび校、ようち園、よっぱらい、よう、ゆかた、ゆ入、ゆ出、ゆたか（な）、ゆうびん、ゆう園地、ざぶとん、さんぎょう、ぜいかん、ぜい金

さて、NZ日本語シラバスの中で不要（使用頻度が低い、古い、難しい、不適切）だと思われる単語もある。例えば、「き車、名し、レンタカー、ワンピース、ボーナス、電ぽう、でんとう、えいきょう、発てん、地ごく、自さつ、家ない、国語、国立、きゅう行、スト、てい年たいしょく」など。

単語数1230は、第3学年から第7学年まで5年間週4時間平均で消化するには大きな困難はないであろうが、この5年間の日本語コースをもっている高校は多くないのが現状である。第7学年の大学入学国家試験（Bursary Exam.）の日本語を受験するには、このシラバスを消化しておかなければならない。レベル2＆3シラバスの取扱いが、NZ日本語教育界の最大の課題なのである。

4．おわりに

ニュージーランドの日本語教育の特徴は高等教育

だけでなく、中等教育においてもこの10年間で飛躍的に日本語学習者が増加してきたことである。学校教育における外国語としての日本語教育の歴史は20年余りであるが、その積み重ねの中から中等教育用日本語シラバス（レベル１とレベル２＆３）草案を文部省が作成し、それに基づいた日本語教育が８年位積み上げられてきた。また、この日本語シラバスに基づいた国家試験も行われてきており、学校教育における日本語教育はかなり定着してきているように見える。

さて、本論では、NZ 日本語シラバスの草案が作成される経過を歴史的に探り、その内容を日本語教育学会編（1991）の日本語初級単語一覧と比較しながら分析し考察した。両者の重なり度合いは約41％であり、予想したほど大きくはなかった。その理由はいくつかあろうが、主な理由の１つは、一般成人を対象とした日本語と学校教育における高校生を対象とした日本語の違いであろう。その意味においても学校教育における日本語の教育は、一種の Japanese for Specific Purposes (JSP) に入るのである。厳密には、その下位範疇である Japanese for Academic Purpose (JAP) ということになろう。

NZ の JAP における最も困難な問題は、トピック・シラバスの運用に関する問題である。つまり、トピックが提示され、各トピック毎に語彙が位置づけられるが、トピック配列の順次性・系統性については教師任せとなっており、教育現場は混乱するだけである。また、トピックの配列と言語材料の配列との有機的な関連性が見えてこない。さらに、コミュニカティブ・シラバスとコミュカティブ・アプローチの関わりが希薄である。最後に、学校教育における日本語教育においては、「訓育と陶冶の統合」という視点も、シラバス・デザインやカリキュラム・デザインに明確に導入する必要がある。

参考文献

1．日本語教育学会編（1991）『日本語教育機関におけるコース・デザイン』凡人社。

2．ニュージーランド文部省（1991）『日本語シラバス　レベル１、レベル２＆３』（Interim Report）；その他、各種統計資料（1990）。

3．縫部義憲（1992）「ニュージーランドの日本語教育(1)―現状と課題―」『日本語教育学科紀要』広島大学教育学部日本語教育学科、23－24頁。

4．Aschoff,Terrence(1992a), *Japanese Language in New Zealand Secondary Schools,* New Zealand Centre for Japanese Studies, Working Paper No.2.

5．Aschoff, Terrence (1992b), *Reasons for Studying Japanese Language in New Zealand Secondary Schools,* NZ Centre for Japanese Studies, Working Paper No.3.

6．New Zealand Qualifications Authority (1991), *School Awards Prescriptions.*

7．Welch,D.C. (1992), *Japanese Teaching in New Zealand Secondary Schools,* the unpublished report to the Japanese Ambassador in NZ。

（在 NZ 日本大使館文化広報センター安井兵典所長のご厚意による。）